

薬や病気のあれこれニュース

鹿屋市立南小学校学校薬剤師 鶴田総宏

③ 薬のお呪(まじない)い

ヒトの体には、とても不思議な一面があります。小麦粉やでんぷんなど、薬として効き目のないもので錠剤やカプセル剤をつくり、例えば頭痛の患者さんに本物の薬として服用してもらって実験をすると、半数くらいの方が治ってしまうこともあります。

薬(に似たもの)を飲んだという安心感が、体にひそむ自然治癒力を引き出すのかもしれませんが。これを「プラセボ効果」といっております。

プラセボは、一般に偽薬(ぎやく)と訳されていますが、本物に似せた気安めの薬と言えるでしょう。

薬の開発段階で、データ収集のためプラセボを使うことがよくあります。医療現場でも実際使われております。

例えば、夜、寝られないから睡眠薬がほしい、と嘆く患者さんがいたとします。主治医は副作用を考慮して睡眠薬をのませることに戸惑いを感じ、デンプンなどでできた睡眠薬をのませると患者さんはよく寝るそうです。

では、プラセボが薬の替わりになるのかといえば、それは違います。プラセボ効果は人によって差が大きく、効果が出るとは限らないため、積極的な治療効果が期待できません。それに対して薬は、できるだけ多くの患者に安定して高い効果を発揮するようにつくられています。

ヒトとはおもしろいもので、これがよく効く薬だと言えば、効いたような錯覚におちいることがあります。病は気から、とよく言いますが、まさに病気一つをとっても気持ちのモチようかもしれません。

薬嫌いな子どもさんをお持ちの方、薬をのませるとき、ぜひ一度「この薬は甘くてすぐ治るよ」としゃべりかけてやれば素直にのんでくれるではないでしょうか。